

『現代中国学』について

— 日中比較文化論の視点から —

藤 田 昌 志

Book Review On KAJI Nobuyuki's *Modern Sinology*

FUJITA Masashi

キーワード：名、実、儒教、人権、法意識

一、序

本書評では加地伸行著『現代中国学』（1997 中公新書）を取りあげて紹介したいと思う。加地伸行氏の略歴は同書の奥付にある通りである。

加地伸行（かち・のぶゆき）。1936年（昭和11年）、大阪に生まれる。1960年、京都大学文学部卒業。高野山大学、名古屋大学を経て、現在、大阪大学文学部教授。文学博士。専攻、中国哲学史。著書『中国人の論理学』（中公新書・1977年）『中国思想からみた日本思想史研究』（吉川弘文館・1985年）（中略）『儒教とは何か』（中公新書・1990年）『沈黙の宗教－儒教』（筑摩書房・1994年）等。

加地氏自身、本書の「はじめに」で言うように「古典中国学や伝統中国の研究者であって、いわゆる現代中国専門の研究者ではない。」しかし伝統中国と現代中国の間には時間的連関があり「古典中国学や伝統中国の研究者の立場から、現代中国を分析し批判し発言し続けてきた」人である。そして、その際「私は日本人であるので、外国人として、可能な限り〈日中文化の比較〉という視点に立つことを忘れなかった。」と言う。双方向の日中比較文化論¹⁾を標榜する筆者からすると「日本からみた中国」の一つのサンプルである。それゆえ取りあげた次第である。加地氏の主張、言辞には時に過激とも思われるものがあるが、それは本人の気質もさることながら、あの「文化大革命賛美」の時代（マスコミがお先棒^{かつ}を担いだ。特に「大新聞」と言われるものがひどかった。）に己の節を曲げず、時代に迎合せず、自分の道を歩んできた人の当時への憤怒の思いがそうさせるのかも知れない。本書の構成は以下の通りである。

序章	中国大陸と台湾と
第一章	名実を読みこむ
第二章	儒教を読みこむ
第三章	資料を読みこむ
第四章	人間を読みこむ

各章は〔講義〕と〔演習（一、二、三）〕に大きく分かれており、前者が「前提となる重要な情報」であるのに対して、後者は「研究」を行う前の「リハーサル、練習、稽古」であると加地氏は言う。大学の教室風景という形式をとった結果、そうなったとのことである。以下、章別に内容を見て、評を加えていくことにする。

二、加地伸行著（1997）『現代中国学』について

二一〇序章 中国大陸と台湾と

序章ではまず「社会主義市場経済」ということばが「政治は社会主義、経済は市場経済」という意味であることが述べられている。更に「経済の資本主義化は鄧小平に始まったわけではな」く、鄧小平はその仕上げを担当しただけで、1949年（昭和24年）に中華人民共和国が成立したときから、ときに主流となり、ときに支流・伏流となり隠現していたことが述べられている。加地氏によると農村派の毛沢東と都市派の劉少奇の闘いにその具体例を求めることができ、文化大革命時代の農村化を継いだ鄧小平体制は都市化を推進する（＝経済を資本主義化する〔筆者注〕）体制であった。

加地氏は「現在、農民は切り捨てられて」おり、「中国の政治問題は、依然として多数を占める農民問題である」としている。鋭い指摘であると思う。²⁾

鄧小平体制は「インフレの下で赤字の国営企業を数多く抱えており、また電力・水道などエネルギー不足は補いようがなく、目下、相当に外貨を貯めこんだものの、見かけと異なって、国力がなく、空洞化」していつている。（本書、執筆時での加地氏の見方。）その空洞化を埋めるために中国に残された道が二つある。一つは「日本からのさらなる借款の要求」であり、いま一つは「台湾が有する巨大な外貨へのさまざまな接近」である。台湾に関連して加地氏は台湾の独立派の主張の主要なものの一つは「言論の自由や財産が奪われることへの拒否」や「大陸から武力攻撃を受ける根拠をなくしたい」ことであると言う。

台湾が大陸の武力侵攻を受けない方策として加地氏は次のような提案をする。「一九九五年現在、台湾の外貨準備高は九五〇億ドルである。このうち、五、六百億ドル分を大陸の債務の肩代わりとすることである。それと引きかえに独立を認めさせ、同時に平和友好

条約を結ぶことだ。大陸は（中略）経済成長と連動する大インフレに苦しんでいる。国家の根核を揺るがしており、日本からの借款を渴望している。そこへの五、六百億ドル（約五兆円）は大陸政権にとって旱天^{かんてん}の慈雨となるだろう。」こうした提案に対して日本人は「金銭で解決するなどとは下品であり侮辱だ」と思うだろうが、中国の多くの王朝は侵略してくる外部勢力に対して金銭、物品で解決してきたから問題はない、「中国人は現実的」で「中国人にとっては〈実〉こそ最優先のものであることを理解すべきである」と加地氏は言う。大胆な提案である。

二-①第一章 名実を読みこむ

第一章では名と実という観点から中国と日本についての論が展開されている。

最初の「講義」〈名〉優先の日本人・〈実〉優先の中国人では大略①言語②金銭③含み④権威と権力⑤〈普遍〉優先と〈個物〉優先の五つのトピックに即して〈名〉と〈実〉について述べられている。

①言語については中国語の本質をその「表意性」に見だし、形声文字が大量に生まれる前の象形文字が持つ「現実^{じつじ}に在るものの写し」(ex. 山、川)としての性質を重視している。そして「こうした漢字を使うかぎり、物はすでに在るという素朴実在論的な見方が常となり、なにはともあれ、ともかくまず物が存在するということから考えることになる。」そして、その結果、「中国人には、常にまず物いわゆる〈実〉を優先するという発想が生まれ、これが名実のうちの〈実〉優先の思想となるのである。」としている。これに対して、日本語は外来語としての漢字を「日本語の場合にあてはめるといふ」「表音的な使用の性格」が強い。このため、漢字本来の持つ象形文字的な「濃密な意味合い」が弱体化する。たとえば、同じ「感謝します」でも、現代中国語では「非常感謝」ぐらいで終わるが、日本語では外来語の“感謝 (gǎnxiè)”という言葉を借りるだけだから中身が薄い。そのため、たくさんのことばを補って「心から、本当に、大変、厚く、感謝申し上げます」というようにし、外来語“感謝”の弱体化を補う(=〈名〉(=形式)優先の日本語)。

日本人は②金銭についても金という〈実〉は一つなのに「贈賄〈名1〉としての金銭〈実1〉」と「パーティー券購入用〈名2〉の金銭〈実2〉」と分ける。逆に〈名〉のはっきりした公用車は公用車以外の私用に使うてはならないということになる。中国人はそんな風に考えず「パーティー券購入すなわち贈賄としての金銭」であり「市長専用公用車すなわち私用車」である。「金は金」「専用車は専用車」という〈実〉中心なのである。

③含みについて。「日本人の場合、実質以外のもの、すなわち、〈含み〉を持たせるということが、われわれの意識の中にある。」と加地氏は言う。たとえば、お中元、お歳暮とい

うのはお世話になったことへのお礼であると同時に「人間関係を継続させるということの一つの方法」として使われている。中国人の場合、お世話になった人にお礼はするが「〈含み〉を持たせて継続的にすることはない。」更につづけて言うには「他人に対しての日本人の謝罪好き、逆の謝罪要求好きは、真の謝罪をするということではなくて、儀式（形式名）としての謝罪にすぎない。いわば謝罪の様式化である。日本人は何でも様式化してしまい〈実〉はすっとなでしまう。茶道、華道、歌舞伎、はては若者たちの風俗さえも。日本人は中身を問わないで様式化してしまうという思考や行動を変えることは絶対にできない。」日本文化は「型の文化」「様式の文化」であるということが言われることがあるが、悪くすると「形式化」「形骸化」してしまうのであろう。（しかし、逆の場合には、簡素な、無駄を徹底して排除した形式美を創り出しているのではないかと思う。）

④権威と権力については「中国人は〈実〉を優先させる傾向があるから、権威と権力とがずれた場合、どちらを重んじるかという、当然、権力のほうを重んじる。」日本でのかつての天皇制の権威重視と中国での皇帝制の権力重視という分け方も可能である。「〈実〉のほうは権力、〈名〉のほうは権威」と言える。

⑤〈普遍〉優先と〈個物〉優先について。たとえば、机を考えた場合、四角い机や黒い机と言った個別的な物、個物を重視する立場と机一般、机そのものという普遍的、抽象的なものを重視する立場がある。「〈実〉のほうはだいたい〈個物〉のほうの意味合いに取りやすいし、〈名〉のほうは〈普遍〉になりやすい。」法律に即していえば、法律は抽象的なものであり、日本人はおおむね法の権威を認めている。また、〈名〉優先であるから、組織とか公とか法人を重視するところがある。「そこから公私の別というようなこともすんなりと分りやすい。」しかし、中国人の場合は〈実〉重視であるから、「あくまでも個別、具体的な一つ一つのケースによって考えるという傾向が非常に強い。」結果、法、組織、公への感覚が希薄になると加地氏は言う。更に次のように述べる。「中国人は〈実〉ということに徹底していて、一人一人の人間が自分の〈実〉を考えるから、個人が非常に強い。ところが集団に共通する利益とか福利とかに関しては、あまり重んじない。これが中国人は集団生活が下手だ、という原因である。」「その点、日本人は、集団の利益を重んじるというところがある。特に〈公私の別〉の〈公〉優先のところがあるから、個人の側も個々の〈実〉ということをあまり要求しない。」

次の〔演習一〕**企業の大陸進出**では、中国では日本に比べて人件費は安い、工作費（賄賂）が何かの頼み事一回ごとに必要だから企業の進出と言ってもそんなに簡単ではないし、又、「〈組織のために〉」働く日本人と「自分への直接の〈利益のために〉」働く中国人という差もあると言う。

〔演習二〕「人治」・「社会主義市場経済」の意味では、中国が〈法治〉ではなく〈人治〉であるというのは中国批判の常套句であるが、欧米では法律が一種の独立物で「法律が人間を支配する」のに対して、東アジアでは「法律は人間が運用する下位のものとしか見ないから」「人間が法律を支配する」ことになるかと述べている。続けて加地氏は日本人には中国を指して〈法治〉ではないという資格がないと言う。なぜなら日本人の〈法治〉も〈欧米流法治〉から言えば「〈お上に対しておとなしく服従する疑似欧米流法治〉」にすぎないからである。

〔演習三〕文臣銭を愛さずんば天下平らかなり—天安門事件に寄せてでは天安門事件(1989)の報道や論評において(十三億の人口のうちの八億を占める農民のかかえる)農村問題がまったく欠落していたことを指摘しているが、至言であろう。又、中国の汚職の追放については「中国社会の官(現在はそれに加えて党)と共同体(その大半は農村)との関係という構造を破壊しないかぎり成功しないだろう」としているが、それも鋭い洞察であると思う。

二—②第二章 儒教を読みこむ

この章では儒教をめぐる日中の死生観や個人主義、家族主義のことが述べられている。

〔講義〕儒教は今も生きているでは儒教の死生観や宗教性の問題が論じられている。昭和30(1955)年代前半、毛沢東万歳、プロレタリア万歳という日本の中国学研究の風潮の中で儒教は批判の対象以外の何物でもなかった。しかし、そのとき、加地氏は儒教の現在までの存続は人々の支持を物語っており、「或る変わらないものが深層に一貫して存在し、その深層に支えられた表層が絶えず変化していたのではないか」と考えた。表層には政治思想や社会道徳が存在するが、加地氏はその深層に儒教の宗教性を見いだした。そして儒教の死生観について次のように言う。

儒教では人間を精神と肉体に分け、精神を主宰する者を「魂」(「云」とは雲のことである)、肉体を主宰する者を「魄」(「白」とは「白骨」のことを指している)とする。「死」とはこの両者の分離である。逆に「両者呼び帰して共存させれば理論的には再び正の状態になる。」そこで魂魄を呼び戻す儀式を行う。その儀式における宗教者が儒である。「魂・魄を呼びもどす———これは魂降^{たまおろ}しいわゆるシャマニズムであり、儒はそれを行う宗教者(シャマン)である。」この行為を加地氏は「招魂再生」(厳密には「招魂復魄再生」と名づけている。「魂」は天空にあるので誰も触れられない。しかし「魄」は地上にあるので他者が触れることができ、ときに犬が白骨をくわえていくことがあるので「魄」を管理する場所がある。それが「墓」であると加地氏は言う。本来、輪廻転生を言う仏教から

は墓の発想は出てこず、現在、仏教に墓があるのは仏教が中国に入ったときに儒教に勝てず、儒教の死生観を取り入れざるをえなかったことによるのであると言う。

〔演習一〕日中死生観の相違では「死者に鞭打つ」^{ごしし}伍子胥的感觉の中国人と死による浄化的感觉を持つ日本人の相違が述べられている。原神道のけがれを忌む思想は儒教と決定的に異なるものであるとしている。更に、東アジア人、とりわけ日本人はアニミズム（万物それぞれが生きて在るもの、すなわち魂を持っていると考える立場）の感觉を持っているから、必然的に多神教的感觉になる。「われわれ日本人は、死後、魂となって浮遊し、だれでも神（靈妙なるもの）となることができる。」のでその神を記念する神社（例えば乃木神社、藤樹神社）を建てても何の不思議もない。こういうことは中国人や朝鮮民族には理解しにくいそれは「アニミズム感觉」が我々日本人より薄いからだと言加地氏は言う。

〔演習二〕個人主義と家族主義では現在の日本について厳しく批判して次のように述べている。「今日の日本においては、家族の抑止力を前近代的なものとしてやみくもに拒否し、家族に対する畏れを否定しているのであるから、またキリスト教抜きであるから自律も自立もなく、ただあるものは自分勝手だけである。すなわち、欧米から輸入した個人主義は、いとも簡単に利己主義へと化した。」そして、世界は、キリスト教文化に基づく欧米近代国家の個人主義を除いて、その他はすべて家族主義と言っても過言ではないと言う。又、東北アジアは多神教であり、一神教のキリスト教を受け入れ難かったから、個人主義とともにキリスト教文化を取り入れるのは不可能だったと言加地氏は述べている。日本について、その近代化は「見かけは（物的には）成功したかもしれないが、利己主義者の国家を作ってきている」のであり、そういう近代化を行ってきた日本の知識人が「家族主義の中国に対して、己の失敗を省みずして、欧米人と同様の目で見、同様の批判をすること」は「思い上がりでしかない」としているのは我々日本人が今、気をつけなければならないことであろう。

〔演習三〕〈儒教の虚像〉に踊った文化大革命ではアメリカと中国の問題に言及し「人権」と「法の意識」の二点にしばってその違いを鮮明にしている。まず「人権」についてはアメリカ（や日本）の言う「人権」は個人主義に基づき、個人の自由や尊厳を前提とした権利であるのに対して、中国大陸では長年、社会主義を標榜していたことから今まで個人主義は否定されていた。個人主義は利己主義と同義にみなされていたのである。加地氏は「個人主義は、キリスト教文化圏の特殊な概念」であり、「普遍的な思想でも何でもない。」「欧米が先進国として世界をリードした時代があったので、彼らは個人主義を最善として後進国に押しつけたまでである。」としている。「法の意識」については欧米キリスト教文化圏では契約の概念が強烈であり、その契約を裏づける〈人権を守る法〉という意識

があるが、儒教文化圏の法は政権の〈統治手段としての法〉である。国民の側の〈人権を守る法〉と政権側の〈統治する手段としての法〉という意識の差は埋めようがないとされている。更に、他のところでは儒教を道徳論であると理解するだけではまちがいであり、毛沢東も魯迅もそのまちがいを犯していると加地氏は言う。儒教の宗教性（〈生命の連続性の自覚〉）を見よと言う。

二-③第三章 資料を読みこむ

第三章では資料を読みこむことの重要性が中国のテレビ報道や宗教弾圧、食糧問題等に即して述べられている。

〔講義〕眼光紙背に徹すべしでは『人民日報』（1991年3月20日号（海外版））に載せられた「元宵^{げんしょう}」という七言律詩を例にして、その中に「李鵬下台、平民憤」（「李鵬よ、首相のポストを下りよ。庶民は憤っている。」）という文字が埋め込まれていることを指摘し、中国風批判の一つのあり方を示している。

〔演習一〕テレビによる世論調査では「中国人為政者は、己れの支持する文化によって民を感化善導するのが政治だという文化観の持主であり、民もまたそれを受け入れる。首相は別として、日本のマスコミでは経済閣僚が話題とならない日はないが、台湾のマスコミでは文相が最も多く登場することが、その文化観をよく物語っている。」とし、政治と文化の密接な関係について言及している。続くところでは四人組裁判のテレビ放映に触れているが、加地氏は四人組について次のように言う。「四人組の彼らに罪などはない。文革を起こすには起こすだけの理由があったからである。毛沢東派と劉少奇派との権力闘争はいちおう括弧でくくっておき、あの当時の中国大陸を顧みるがいい。国内的には一部の特権階級があり、圧倒的大部分が極貧の生活であった。そして対外的には米ソ両大国の軍事的経済的重圧があった。それに対抗し、なおかつ第三世界や北ベトナムに援助しなければならなかった。」「大部分の都市にまともな工業はなく、上級学校卒業生に与える仕事などない」状況で、1957年から実施されていた「下放」（軍人や都市生活者の農業労働従事）を大々的に打ち出した。それは「中国大陸の最大問題である農業生産を上げること、青年に職を与えること、外国の援助に頼らぬこと等々を解決する一石何鳥もの案のはず」であった。加地氏は文革派が1966年前後の時点で「農業に全力投球しようとした政策は正しかった」としている。しかし「残念ながら人間が本能的に持つエゴイズムの根深さを忘れて奉仕ばかりを求めたために、この政策はまもなく失敗し、混乱を深め、貧窮度は加速されて」いったのであった。四人組批判については「無知な大衆に対する為政者のテレビやラジオを利用した巧みな操作」であり、「或る攻撃性」を人為的に作り出し、そこに向かって民

衆の日頃の不満の感情を爆発させ為政者に対する批判のエネルギーを解消するという、為政者の常套手段の顕現であったと加地氏は言う。

〔演習二〕大陸における宗教弾圧ではカトリック、イスラム教、ラマ教、仏教、道教への宗教弾圧について述べられている。詳細は本書を読みたい。

〔演習三〕大陸の食糧問題では「大寨」は「自力更正の大寨」という虚像を国家がその援助と指導のもとに作り出したものではないかと疑念を表明している。

二-④第四章 人間を読みこむ

この章では齊白石や江青という人間に焦点を絞って中国人の姿を明らかにしようとしている。詳しくは本書を読みたい。

三、まとめとしての全体的批評

以上、加地氏の『現代中国学』について各章別にその内容を見て、批評を加えてきたが、紙数の関係で詳述しなかったところもある。最後に、本書を通読後、全体的に振りかえった際の批評（今までに触れなかった点も含めて）を行いたい。

第一章 名実を読みこむで名優先の日本人、実優先の中国人という考えを提示したのは当を得ていると思う。それぞれ①言語②金銭③含み④権威・権力⑤〈普遍〉優先と〈個別〉優先というトピックについて具体例を挙げ説得力のあるものになっている。私は十数年前、初めて中国へ行ったとき、直感的に、ここではすべてが、まず「モノ（物）」として存在しているのではないかという印象を持ったことを覚えている。加地氏の言う「中国人は実優先」というのはそうした私の直感も含んでいるように思う。

第二章 儒教を読みこむでは日本人の(死に対する)浄化的感覚と死者を鞭打つ中国人の伍子胥的感覚の相違が〔演習一〕日中死生観の相違の中で述べられているが、いわゆる『靖国問題』の根底には、そうした文化的相違が潜んでいて、更に、実中心/名中心ということがからんでくるので問題が複雑になっている面もあるのではないかと思う（私はかつての戦争は日本が正しかったなどと言っているのではない。念のため。）。「文明（技術）に上下はあっても文化（生きかた）は相対的なものであって、上下などない」（p. 44）から文化の衝突を避けるためには相手と自国の文化に通暁する必要がある。いつまでも同じことをくりかえしているだけでは相互の不信感がつるだけである。〔演習二〕個人主義と家族主義ではアメリカの学者ハンチントンの言う〈文明の衝突〉は「ある意味では正しい。」「その主張は、キリスト教文化的個人主義対儒教文化的家族主義と見ることができよう。」（p. 107）としているがアメリカと中国の対立点については〔演習三〕〈儒教の虚

像〉に踊った文化大革命で「人権」と「法意識」の相違として述べられていた。第三章資料を読みこむではスケープゴートとしての「四人組」の姿が明らかにされている。

第四章 人間を読みこむでは江青の悲劇が語られていた。又、日本と中国での文芸の位置の違いについても述べられている。(文芸は政治の下にあるとする中国とそうでない日本。)

以上、個別的に(二)、又、全体的に(三)、内容を見て批評してきたが、全体を通して感じるのは加地氏の「気骨」である。頭がいいだけの学者はいくらでもいるだろう。しかし、「気骨」のある学者は少ない。加地氏はその数少ない一人ではないだろうか。本書の紹介が日本人の中国理解に資するところがあれば幸いである。又、機会があれば良質な日中比較文化論の本を紹介したいと思う。

【注】

- (1) 拙稿『『小室直樹』の中国原論について』(2000) 三重大学留学生センター紀要第二号 pp. 105-106
- (2) 村山宏(1999)『中国「内陸」発』日本経済新聞社は更に、農村を含む「内陸」に焦点をあてた高著である。